古代ギリシア語

ギリシア語を学んだ経験を振り返って

近松　明彦

個人的な話になるが、大学の学生であった頃ギリシア語を学び始めたときの体験を書かせて頂く。英語の方面に進んできたが、ギリシア語を学んで良かったと感じる。一例を挙げれば、欽定訳聖書は周知のとおりギリシア語で書かれた原典を英訳したものである。

古典ギリシア語の学習は、私の場合、最初いくらか集中的なものであったように思う。大学3年のとき、クセノポン (Xenophon) の『アナバシス』(Anabasis) の授業を受講した[1]。ギリシア語の初級文法を学ぶのと平行しての出席であった。前年、古典語の科目としてラテン語の方を選択していたためであった。私は英語関連の科目を多くとっていたが、そのような状態の下での学習であった。

『アナバシス』の授業には、綿密な準備が必要であった。学生が順にテクストの担当箇所の文法的分析とその解釈を説明し、先生がそれにひとつひとつコメントを加えて下さった。初心者の私もやがてその担当に加わることができるようになっていったように思う。

『アナバシス』のテクストとして用いられたのは、Loeb 叢書の版であったと記憶している。これは、ギリシア語原文とその英訳が対照されている対訳本である。また、翻訳と言えば、同じ頃、日本語訳が出版された[2]。

既に書いたように、『アナバシス』の勉強と同時に、ギリシア語文法クラスにも出席していた[3]。文法の教科書は後半が読本編になっており、かなり早い段階から注釈を手がかりに、まとまりのある文章を読んでいった。その後、松平千秋先生が書かれた文法書も、折りにふれ利用させて頂いた[4]。

古典ギリシア語文法の学習で最も大変だったことは、活用、曲用といった語形変化が著しいことであった。不規則な語形変化を行う単語の場合、文法の知識がないと、辞書の見出し語がどれになるのかわからないこともある。語形変化表の見方に習熟することが第一に必要となる。

次に、辞書も不可欠であった。私がギリシア語の勉強を開始した当時、古典ギリシア語－日本語の辞書はいまだ出版されていなかった[5]。共に勉強していた学生たちの間では、Oxford から出されている Liddell and Scott による *A Greek and English Lexicon* の Abridged 版を用いている者が多かった。私も主としてこれを用いた。しかし、後には、Abridged 版だけでなく、本来の大辞典（同じ編者、同じ出版社による本で、全一巻）も購入し、時々利用した。ギリシア語には方言その他、表記、語形の揺れが少なくない。従って、詳しい辞典が必要になることがしばしばであった。

このように、古典ギリシア語の学習では、多くの参考資料が必要であった。原典のほか、文法書、辞書、翻訳を参照した。その上、希英辞典や英訳本を見るために英和辞典も持参した。通学時、荷物が重かった記憶がある。多くの参考資料を参照せねばならず、読むのに時間がかかった。速度を上げることも課題であった。

初級文法を学んでからは、ギリシア語の読書会に出席して、原典を読み続けた[6]。コイネー・ギリシア語の新約聖書の『ヨハネ伝』[7]、ヘロドトス (Herodotus) の『歴史』(Historiae) の一部、その他プラトン (Plato) の作品等を順に読んだ。

『ヨハネ伝』では、参加者がそれぞれに異なるテキストを持ち寄っていたように思うが、私は、Nestle-Aland 版の *Novum Testamentum Graece*（Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart 発行）を使っていた。『ヨハネ伝』は、Semitic の系統の言語からの影響が大きいと一般に言われる。一方、それは簡素な文体で書かれており、初心者の私には読みやすかった。

ヘロドトスの読書会では、Oxford Classical Texts の版が用いられていた。文法のクラスで学んだギリシア語がアッティカ方言を中心としたものであったのに対し、ヘロドトスの作品はイオニア散文に属する。そのため、辞書で単語を調べる際など、時折困ることもあった。

そのうちに、欧米のギリシア語関係文献にも目を通すことになった。例えば、Smyth の文法書などである。しかしこのときは、言語学上の一定のテーマについて研究するために調べたのであった。語学の習得を目的とした読み方とは少し異なっている。

ギリシア語を学ぶ上で重要と思われたことは、根気ということであった。ギリシア語を学んで良かったと思うと同時に、地道な努力の必要を感じている。

注

1) 古浦敏生先生が担当されていた。
2) 松平千秋先生が訳されたもので、昭和 60 年(1985)に初版が筑摩書房から発行された『アナバシス　キュロス王子の反乱・ギリシア兵一万の遠征』である。
3) ギリシア語文法は、竹島俊之先生が担当していらっしゃった。
4) a. 田中美知太郎・松平千秋 (1962)、『ギリシア語入門 改訂版』（岩波全書）、岩波書店.
   b. 田中美知太郎・松平千秋 (1968)、『ギリシア語文法』、岩波書店.
5) 但し、新約聖書ギリシア語の辞典は当時既に出版されていた。
6) 読書会も、文法クラスと同様、竹島俊之先生が中心に進められた。
7)（羅）(Evangelium) Secundum Iohannem,（希）Κατὰ Ἰωάννην.